

インプラント医療のノーマライゼーションに向けて

理事長 瀬戸暁一

日本の歯科医療は未曾有の荒天に直面し、歯科界の人々は迫りくる荒波を予感しつつも、為す術もなく現実逃避に終始しているのが実態でしょう。なかでも教育の現場においては受給の破綻を「ひとの所為」にして、不毛な受験生集めを繰り返しており、明日の歯科医学、歯科医療を展望するどころではないのが実状です。なぜ歯科医学が若者からこれほど振り向かれなくなっているのかを考える余裕すらも失い、現場の務めを処理しているうちに時間が経過しているように見えます。やがていくつかの船が座礁して消えていくのを、歯科界はじっと待っているようにも受け止められます。

問題はこの間にデンタルサイエンスが大きく停滞し、世界の標準を大きく下回り、何よりも患者さんの信頼を失うことが懸念されます。インプラント医療の質も例外ではありません。尤もインプラントは卒前教育の実績の積み重ねも少なく、実質的な教育は各メーカーのシステムに委ねられ、これらの拡販路線に沿って行われてきたと言えます。少なくともインプラントの基礎科学は歯科教育機関から十分発信していなかったなかで、突然の「歯学部危機」に直面していることとなります。

インプラントは歯科医学が誇る安全で高性能な画期的機能回復手段であるにも関わらず、サイエンスとスキルの欠陥によるトラブルの急増に頭を抱えているのは日本のみではありません。韓国、中国、台湾、さらにはスイス、ドイツ、米国などにも同じ悩みはあるようです。特に日本の惨状は著しく一般社会問題にまでなっています。崩壊しつつある歯科医療を横目で睨みながら、成長過程にあるインプラントを国民から信頼される医療として定着させることが、本学会に課せられた大きな使命であることを、会員の皆様も十分理解されておられることと思います。

そこで本学会が果たすべき役割は何かについて、いろいろな方向から考えなおしつつ、学術大会の場で議論したいと考えております。次世代の歯科医学、歯科医療を構築する上で、どのような臨床研究が必要で、サポートする基礎科学はいかにあるべきかについても真剣に議論したいと思っております。

深まりゆく秋の佇まいのなかで、地に足をつけた学術交流を行い、それが国民に感謝される新しい医療が生まれる緒になれば幸いです。

嶋田淳教授をはじめ、竹島浩准教授をはじめとして明海大学のスタッフのみなみならないご努力のおかげで完璧な準備をしていただきました。感謝の気持ちでいっぱいです。新しいインプラントアカデミズムが、浦安から発信することを願って、実り豊かな学会になることを期してやみません。